

すさんだ気持ち 酒で紛らわす

心災

2 孤立

二月下旬、宮城県石巻市の三陸道石巻河南インターチェンジに近い仮設住宅には、まだ半月前の大雪の名残があった。「大変だったけど、ちよっとほっとした。若い人がたくさんで雪かきしてくれて」。夫婦で暮らす男性(☆)は、そう言ってお酒を飲んだ。

四畳半にこたつを置いた一室。高窓から差し込む光は弱々しい。「ここに移ってからだめだった」。男性はアルコール依存に苦しんだ三年を振り返った。

二〇一一年三月十一日は花見の季節を前に、沿岸部が見晴らせる日和山で桜の木の花切りの仕事をしていた。津波で流されていく自宅を、あぜんとして見ているしかなかった。翌日、自宅跡にたどり着こうとする間、遺体も多く目にした。「近所の人、仕事でお世話になった人、亡くなった話ばかり。つらかった」

五月初めに仮設に入居すると、何とも言えない気持ちの落ち込みが襲ってきた。朝から酒を飲み始めた。酒を買わぬよう妻がお

津波に流され墓地以外は更地のままの市街地。桜のつぼみはまだ堅い＝8日、宮城県石巻市の日和山公園で



金を置かず仕事に出ると、仮設内で見知らぬ高齢男性宅に上がり込み、酒をせびって気を失った。三月月間入院治療した。だが、退院するとまた不安になった。「いつまでここにいないくちやいけないんだ」。紛らわせるように再び酒に手を伸ばした。妻に

「戻ったら死んでるんじゃないかと思って玄関を開けるのが怖い」と言われても、心配して訪れた長女が泣きながら止めても、飲まずにはいられなかった。迷惑を掛けた友人とも疎遠になった。三度目に入院した昨夏、携帯に登録した友人の連絡先を全て消した。「仕事もなく、友人とも会わない生活。寂しい」。好きな樹木を見ながら散歩したりして、今は何とか酒を遠ざけている。

* *

被災地の中高年男性に急増するアルコール依存症。市内最大の開成仮設住宅では、母親(☆)と暮らす男性(☆)も、震災翌年の二年の年明けから酒に溺れるようになった。寒さや暗さになり、気持ちが落ち着かなくなったと言った。

た。「狙われている」「息子が殺される」。幻覚幻聴におびえ、トイレに閉じこもったり、夜に一人で外に出てしまったりした。譫妄と診断された。認知症とともに被災地の高齢者が増えており、ストレスが背景にあるとされる。母を一人で置いて仕事探しもできず、閉じこもりがちの日々を送る。

* *

被災者の心の状態を探るアンケートを実施した東日本大震災圏域創生NPOセンターの太田美智子さん(☆)は「心の後遺症を回復させる一番の薬は、人とのつながり」と話していた。「隔離されれば、心はすきみ社会生活はできなくなる」。心の「余震」に独りで立ち向かう人々を訪ね歩き、震災直後、絆や助け合いが盛んに叫ばれたことをはるか遠くに感じた。(小林由比)

被災地のアルコール依存症 宮城県唯一の専門病棟がある東北会病院(仙台市)の新規患者数は、震災前三年間の年平均が二百七十一人だったが、一一年度二百九十三人、一二年度三百四十四人と増え、一三年度も過去最多となる見通し

だ。震災の被害が大きかった沿岸部で増加が目立ち、多くが中高年男性。病院の医師らが訪問していた患者の中にも衰弱し、孤立死した人が三人いる。石川達院長は「孤立と酒の問題はつながっている」と指摘する。